SAI

Ｔ．Ｋ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＡＩ

【Ｎコード】
Ｎ７９０９Ｐ

【作者名】
Ｔ．Ｋ

【あらすじ】
小柄で童顔、長い髪は染めたこともなく、人に与える第一印象は「大人しそう」。その外見のせいでちょっと人通りの少ないところに行けば不良に絡まれ、電車に乗れば説教好きの酔っぱらいに捕まり、怪しげな宗教の勧誘から必死に逃げ回る日々。そんなんですが、夜は世のため人のために活動しております！

序章　「あーもう！　頑張ったのに！」

世の中に不気味な場所というのは数在れど、その中でも夜の学校というのは一二を争うのではないかと思う。

（なーんでまた、こんな場所に逃げようと思ったんだか）

数年前に廃校になり、そのまま建物だけが残された。まだ「朽ちている」と言えるほどではないが、人の手が入らなくなった廊下は全体的に埃を被っている。その廊下の中程にある水道の脇にしゃがみこみ、彼女はじっと時を待っていた。

最近このあたりに現れるようになった切り裂き魔。それを捕らえることが今回の目的だ。だが彼女に与えられた役目は、廃校に逃げ込んだ切り裂き魔の追跡ではなく――――彼女らと同じように切り裂き魔を追ってきた、他のギルドの妨害、つまりは時間稼ぎだった。

しばらく闇の先を睨み付けていると、そこから複数の足音が聞こえてくる。やっと来たか、とため息をついて、彼女は立ち上がった。壁に張り付くようにして様子を伺う。まだ相手に彼女の姿は見えていないはずだ。呼吸を整え、飛び出すタイミングを計る。

「まったくもう、なんでこんな場所選んだのよ」

「知らないよそんなの、通り魔に聞けば？」

「私たちにとっても好都合でしょ？　多少壊したって、ここなら怒られないでしょうし」

「思う存分暴れられるってことね」

「そうだけど～」

（……賑やかなことで）

これから通り魔と一戦交えようかというのに、まるで緊張感がない。思わず脱力しそうになり、慌てて表情を引き締める。

緊張感がないということは、それだけ自信があるということだ。その相手……それも複数に、彼女はひとりで挑まなければならない。

「ちょーっと待った！」
声を上げて、飛び出す。相手は三人だった。いずれも二十代前半の女で、長い足を強調するようなホットパンツにTシャツという格好をしている。違うのは髪型で、右からショート、セミロング、ポニーテールというところだった。もうとっくに目は闇に慣れていたが、流石に色まではわからなかった。
「ここを通りたければ、私を倒してからにして頂きましょうか」
不意をつかれた女たちは反射的に身構えたが――――勇ましくそう言い放った彼女を見下ろして、揃って笑い声をあげる。
「何あの小動物！　ギャグ？　ギャグなの？」
「私を倒してからにしろだってさ。誰に対して言ってんだか」
「お嬢ちゃん、もう遅いんだから、早くママのところに帰りなさいな」
女たちの反応は既に予想通りのものだった。小柄で童顔、長い髪はいじりもせずに適当に結んだだけで染めたこともなく、初対面の人間にまず与える印象は「大人しそう」である。闇に紛れるために、上下共に黒尽くめな服装で来たが、それも女たちには「ただ子供が格好つけているだけ」に見えただろう。実年齢なら今年で十七になるが、生まれつきの童顔と低身長、何年経っても女らしくなってくれない体型のせいで、中学生に、下手をすると小学生に間違えられたこともある。
そのため、女たちの反応は予想できていたし慣れてもいた。が、腹が立たないわけでもない。隙だらけのままげらげらと笑っている女たちを見逃すつもりもなかった。
腰を落とし、姿勢を低くして、真っ直ぐに踏み込む。狙いは三人組の真ん中、セミロングの女。手加減は一切せず、掌底をセミロングの鳩尾に叩き込む。
「っあ……」
掠れた声がセミロングの口からこぼれ落ちる。身体をくの字に折った女の首筋に、彼女は容赦なく踵を落とした。セミロングが昏倒

する。
「アヤミ!?」
「このっ」
女の悲鳴と、風切り音。嫌な予感に従って、彼女は二人目への攻撃を止めて大きく後ろに跳んだ。
ショートがこちらに向けて、警官が持つ警棒のようなものを突き出している。ポニーテールは昏倒した仲間を抱き起こし、こちらを睨み付けていた。
（あと、ふたり）
相手が油断してくれている間に、一対一まで持ち込みたかった。ひとりの相手に夢中になっているうちに、もうひとりに脇をすり抜けられたら、彼女がここにいる意味がなくなってしまう。
（それなら）
彼女は女たちに笑いかけた。不敵に、挑発的に見えるように。
「私の名前は速水灯。星月夜の一員です。以後お見知りおきを」
芝居がかった口調でそう告げ、気障らしく一礼してみせる。
（それなら、あたしに夢中になればいい）
通り魔のことを忘れさせ、灯を倒すことだけに集中させれば良い。
「あんた……生意気だよ！」
「これはお仕置きが必要ね」
ショートが警棒を構え、ポニーテールが右手に赤い光を纏わせる。
彼女は不敵に笑ったまま、ふたりに向かって突進した。

「あはははっ。おーにさんこちら、てーのなーるほうへ」
夜の廃校の中で、無邪気な明るい声が響く。歌うようにして学校の廊下を駆けているのは、十代前半の少年だ。成長期に入るのはまだこれからというところで、未発達は短い手足を振り回すようにして走っている。鬼ごっこにでも興じているかのようだが、その手には、刃を限界まで引き出したカッターが握られていた。

「もういい加減捕まって欲しいんだけどな」
「嫌だよ。そんなのつまらないもん」
独り言のように呟いた言葉に、すぐに反応が返ってくる。彼は顔をしかめた。
（能力を使って来ない……てことは、あいつは覚醒者か？）
相手は子ども。こちらは二十代前半の成人男性である。本来ならこうして長々と追いかけっこをする羽目になるわけがなかった。外見に似合わぬ体力や脚力から、覚醒者であると考えるのが妥当のように思える。
とはいえ、終わりはもう見えている。無邪気に鬼ごっこに興じている少年は気付いていないだろうが、彼は少年を屋上の方へ追いつめることに成功していた。逃げ場のない場所にまで誘導してしまえば、後はもう簡単だ。
「あはっ、こっちこっち～」
少年が屋上へと続く扉を開ける。彼も続いて、屋上へと飛び出した。
「さーて、鬼ごっこはもうおしまいだな」
「そうだね。僕の勝ちだ」
墜落防止のためのフェンスを背にして、少年が冷笑を浮かべる。先ほどまでの無邪気さや、幼さなどは微塵も感じられない。
「いやいや、俺の勝ちだろ。いくらなんでもこんな狭いとこで逃がすつもりはないし」
この廃校は四階建てで、屋上から地上までの距離は三十メートルはある。飛び降りたら怪我だけではすまないだろう。
少年の表情は変わらなかった。背伸びをするように爪先立ちになり――――やがてゆっくりと、その足が地面から離れる。風船のようにゆっくりと、上昇していく。
「実は能力者でしたってか」
「ふふふ、すごいでしょ。重力操作ってね、こんなこともできるんだよ」

少年は得意気に言った。
「こんなすごいことができるんだもの。僕って特別だよね。特別だから何したって許されるんだ。だって僕に逆らったら、どうなるかわかんないもんね？」
「……へえ」
彼は目を剣呑に細めた。少年はそんな彼の様子に気づいていない。
「おにーさんも最初は気に入らなかったんだけどさ、僕にここまでついて来れたってことはおにーさんも特別なんだろうね。僕ほどじゃないんだろうけど。でもさ、あのさ、僕気に入ったからおにーさんのこと。だからおにーさんは見逃してあげる」
「そいつは光栄だな」
唸るようにして返してから、彼は低く囁いた。
「――――さあ、覚悟はいいな？」
彼の身体を、赤い光が薄く覆った。軽く助走をつけて、少年に向かって跳び上がる。普通ならば助走をつけたところで少年の足もとにすら届かないだろうが――――彼は、少年の足首をつかんでいた。
「えっ、なんで！？」
「特別ってのは実は結構たくさん居たりするってことだな」
動揺しじたばたと暴れる少年には構わずに、彼は腕の力だけで少年の身体によじ登った。背後から抱え込むような体勢を取り、少年の首に腕を巻き付け、締め上げる。
「大人しく降りないと、俺と心中する羽目になるぜ？」
「こ、このっ」
彼を振りほどこうと少年は尚もじたばたと暴れるが、力比べならば負けるつもりはなかった。上昇し続けていた少年の身体はゆっくりと、屋上へと降りていく。
（やーっと終わりか。あー疲れた）
飛び降りても問題なさそうな高さまで降りた時に、彼の視界の隅で、赤い光が煌めいた。
「……！」

嫌な予感に従って、少年の首を締め付けていた腕を緩め、飛び降りる。次の瞬間、圧縮された空気の塊が、暴力的な速度で少年に向かって発射され、少年を撃ち落とした。

（……容赦ねーなー……）

「やったわ！」

「サトコやるぅ」

「ミッション完了ね！」

衝撃を殺すためにごろごろと転がりながら、彼は屋上に現れた女たちを見て舌打ちした。どうやら足止め隊は失敗したらしい。彼女たちがここにいるということはそういうことだ。

気絶したらしい少年を取り囲んで歓声を挙げていた女たちのうちのひとり――――ポニーテールの女が、こちらに気付いて近づいてきた。勝ち誇ったような表情で告げてくる。

「色々と妨害工作してくれたようだけど、結局はあたしたちアマゾネスの勝ちね」

「へいへい。……それにしても容赦ねーのな。下手すりゃ俺にも当たってたかも」

「あら。だから飛び降りても大丈夫なところまで待ってあげたんじゃない」

「そいつはどうも」

感情を込めずにそう言って、彼は女たちに背を向けた。

少年のことは諦めるしかない。次に彼がすべきなのは、アマゾネス足止めのために配置した自分のギルドの仲間の回収だった。

――――青済市和良区ハチ村。

都市としては、東京・大阪・横浜に次ぐ、物流が盛んな政令指定都市。

その青済市の中でも、第二の商業区として発展し、高校や大学など数多くの学校が集まっている和良区には、そこに通う学生をターゲットにした連結商店街地域「ハチ村」が置かれていた。

衣料品店やファーストフード店、ゲームセンターなどの娯楽施設はもちろん、アロマやマニキュアの専門店、カプセルホテルのような宿泊施設まで、ハチ村で揃わないものはないと言われるほど、たくさんの物と人が和良区に集まっていた。

しかし、それだけ人が多くなると、当然のことながら、治安にも影響が出始める。

強盗や通り魔――――そして、「ｄｏｏｒｓ」という薬物の蔓延。

世に出回っている麻薬と比べて、中毒性が低く、安価であることから、学生たちの間に広まっていったこの薬には、ある種の言い伝えのようなものがあった。

曰く、「ｄｏｏｒｓ」使用者は、強大な力を手に入れる。

曰く、「ｄｏｏｒｓ」使用者は、魔法が使えるようになる。

曰く、「ｄｏｏｒｓ」の後ろには、巨大な組織が潜んでいる。

どれが真実なのかはわからない。だが、好奇心旺盛な学生たちの興味を引くのには十分すぎるものであった。

そして、ｄｏｏｒｓの出現とほぼ同時期に、和良区の中で「ギルド」というものが誕生した。

急速に悪化した治安に、地元の警察だけでは対応できなくなり、苦肉の策として、和良警察とハチ村が共同して、「通り魔・強盗などを現行犯逮捕したものの身柄を現金で買い取る」という知らせを出したのだ。腕に自信がある者、正義に燃える者、合法的に喧嘩がしたい者……動機は様々だが、犯罪者にかかった賞金目当てに活動する者たちが集まり、やがてそれが青済市に所属する「ギルド」と呼ばれるようになった。

速水灯も、ギルドの一員であり、またｄｏｏｒｓ使用者でもあった。

――――気がつけば。

そこには既に、ショートもセミロングもポニーテールも居なかった。更に自分が惨めに廊下の真ん中で踞るような格好になっている

ことにも気付く。
「ああもう、頑張ったのになあ……」
我ながら、よくやった方だとは思う。
相手は身体能力の高い覚醒者と、風を自在に操る能力者の二人。急所めがけて突き出される警棒を弾いて、打ち出される空気砲を避け、隙あらば攻勢に出る。与えられた役目は時間稼ぎなので、倒されさえしなければ良かった。このまま上手くいくと思っていた。気絶させたはずの、セミロングの女が立ち上がるまでは。
三対一になると、どうしようもなかった。攻撃するための隙はなくなり、逃げ回るだけで精一杯になる。追い詰められ、逃げる場所も失った。衝撃が身体を貫いたのは覚えている。そして、おそらく今まで気絶していた。
寝返りを打つように転がって、仰向けになる。今さらになって背中が鈍痛を訴えてきた。右腕で目を覆うようにして、うめき声をあげる。
「あー、えーと、あー。その。生きてるかー？」
「……見ての通り、死んでます」
「そうか。なら大丈夫だな」
不意に降ってきた声に、安堵したような響きを聞いて、灯は右腕を顔の上から退けた。どうやら予想以上に心配させてしまったらしい。子供のように拗ねている場合ではなさそうだった。
ゆっくりと起き上がる。視界が微妙に揺れた。それが治まるまでは立ちあがらない方が良いだろう。膝を抱えるようにしていると、相手の方が前にまわりこんできた。
「あー、その、なんだ。誰でも失敗はあると言うか、まあ、そう気にするなってことで」
「……精進します」
「……うーん、微妙に違うんだけどな」
こちらに視線を合わせるように、向こうも片膝をついていたが、それでも小柄な灯は見上げなければ目も合わせられない。同年代の

少女たちの中でも小柄な灯と、成人男性の中でも長身の部類に入る彼とでは、当然の結果とも言えるが。
黒のタンクトップの上に上着を羽織り、ジーパンという格好。服の上からでも鍛えていることがわかる肉体。顔の左半分を覆うような、大きな眼帯が左目に張り付いている。闇にまぎれて今はわからないが、彼が暗めの茶髪だということも灯は知っていた。
「それで、カズさんの方はどうだったんですか？」
「いやー、そのー。なんつーか」
はっきりとしない答えに、嫌な予感を覚える。見上げると――――その時になって、ようやく――――カズが、彼とそう変わらないぐらいの青年を背負っていることに気付いた。気絶しているのか、ぐったりとしたまま動く気配がない。灯と同じくアマゾネスの足止めをしていた青年だ。今回の足止め係は二人。灯は先ほどまで気絶していたし、もうひとりの青年もこの有様。と、いうことは。
眼帯に隠されていない右目だけが、逃げるように視線を彷徨わせている。
「……次回、頑張ろうな？」
「あああもうっ！　頑張ったのにいいいっ！」
決定的な言葉を受けて、夜の廃校に灯の叫びが響き渡った。

第一章　「お前ら、なにやってんの？」

先生は、暴力を振るわれたからってやり返すような人は大嫌いです。

小学生の時、担任の教師にそんなことを言われたのを覚えている。大嫌いで結構だ、と思ったことも。

教師の立場として、暴力を肯定することができないのはわかる。だが、それでは先に暴力を振るった方には非がないと言っているようではないか。

やり返すな、話し合え。言うのは簡単なことだが、それができない相手もいる。

例えば、言いがかりとしか思えない理由で戦争を仕掛ける大国や、朕のためと言って子どもに手を挙げる親や――――遅刻寸前で近道をしようと大通りから少し外れた路地に飛び込んだ女子高生を、三人がかりで取り囲んで集金活動に精を出す不良などが、候補として挙げられる。

「なあねーちゃん。ちょっと金貸してくれよ」

「俺たち、今貧乏でさー」

「人助けだと思ってさ、なあ頼むよ」

（……ああもう、ついてないなあ）

にやにやと笑いながらこちらを見下ろしてくる不良たちを見て、灯はため息をついた。焦りや恐怖がないのは、こういったことにはもう慣れきっているからである。小柄で童顔、大人しそうな女子高生というのは、不良たちにとって良い獲物というわけだ。

今日は遅刻決定だな、と諦めにも似た気持ちを抱きながら、不良たちを観察する。

毎朝セットするのにどれくらい時間をかけているのか、ハリネズミのように金髪を逆立てた少年。灯の正面を陣取り、二メートル近いと思われる長身と相撲取りのような体格を活かして、文字通り壁

になっている坊主頭の男。中途半端に長い茶髪をかきあげ、にやにやと笑っている男子高校生。
いずれも、だらしなく着崩しているものの、同じ制服に身を包んでいる。学校の名前まではわからなかったが、おそらく偏差値が底辺あたりの不良の巣窟だ、と勝手に決めつける。
茶髪の肩ごしに、大通りが見えた。あそこまで行けば灯の通う青済女子高校はすぐである。
サラリーマンらしき中年男性と目があった。彼は一瞬だけぎょっとしたような表情を浮かべ――――何事もなかったように足早に立ち去って行った。
不良に絡まれている子どもを助けてやろうなどという正義感などは持ち合わせていないようだ。他人など所詮そんなものである。
「おい、聞いてんのか？」
「まあまあ、そんな焦んなって」
「お前がでかいから、びびってんじゃねえの？」
何の反応もしない灯に苛ついてきたのか、坊主頭が睨み付けてきた。他の二人は、にやにやと笑っているだけである。
これからどうしようか、考えられるものを、ひとつずつ頭の中で並べてみた。
一、不良たちに従って、素直に財布を渡す。
二、金は持っていないと言う。
三、大声をあげて助けを呼ぶ。
四、実力行使。
（一と二は無しだな）
現在の所持金は、ほぼ小銭のみという状況で、不良に「貸してあげる」だけの金額は持ち合わせていない。が、それを素直に言ったところで不良たちがはいそうですかと納得してくれるとは思えなかった。下手をすれば、もっと面倒なことになってしまうかも知れない。
一番手っ取り早いのは実力行使だが、それはそれで別の問題が発

生する。
もし目撃者がいた場合、親切で良心的なその人物が、「青済女子高校の生徒が、不良相手に喧嘩していましたよ」とわざわざ学校に連絡する可能性があるのだ。
制服自体は白いシャツに紺色のブレザーと地味なのだが、青済女子高校では、性犯罪防止という名目で、スラックスの着用も認められている。このあたりで女子のスラックス着用を認めているのは、青済女子高校だけなので、灯の格好を見ればどこの生徒なのかすぐにわかってしまうのだ。
正当防衛だと主張したところで、頭の固い教師たちは聞く耳など持たないだろう。「先生は暴力を振るう人は嫌いですが、暴力を振るわれたからってやり返す人は大嫌いです」である。
そうなると、後はひとつしか残っていない。
「おいこら、聞いてんのかよ」
「びびらせんなよ、可哀想だろ」
「俺ら怒らせない方が良いよ〜？　あいつ、この前コンクリにヒビ入れたんだぜ」
坊主頭がこちらに見せつけるように指を鳴らした。後の二人も口調こそ変わらないものの、思い通りにならない苛立ちがにじみ出ている。
灯は大通り側を塞いでいる茶髪の顔をぼんやりと見上げ、大きく息を吸い、
「きゃあああああああっ！」
思い切り、金切り声を上げた。不良たちが驚いて行動できないでいるうちに、声を限りに叫ぶ。
「誰かっ！　誰か助けて！」
「てめえふざけんなよ！」
襟首を掴まれ、背後の壁に叩きつけられる。もともと壁に貼り付くような形だったので、痛みは無かったが、背中から肺に抜けていった衝撃に呼吸が詰まった。

「……っざ、けてんのは」
助けは来なかった。これだけ大声を上げたのに、誰も聞こえなかったということはないだろう。結局、皆あのサラリーマンのようなものなのだ。
襟首を掴んでいる坊主頭の腕に手をかける。こうなったらもう実力行使しかない。
予想外の反応に動揺したのか、ハリネズミと茶髪の顔から笑みが消えていた。困惑と怒りが混ざったような表情が、剥き出しになっている。
「ふざけてんのは、そっちの――――――！」
「お前ら、何やってんの？」
気だるげな少年の声が聞こえた。気合いを遮られ、拍子抜けする。一瞬後に、不良たちの仲間が来たのではと思い付いた。四対一では勝ち目がない。
幸い、それはただの杞憂だった。
灯の襟首から手を離し、不良たちが声の主の方へと振り返る。
「何って、見てわかんねーの？　募金活動だって」
「俺らはそこのやつに募金活動お願いしてんの。可哀想な子達にアイの手を～ってな」
坊主頭が不機嫌に、ハリネズミが馬鹿にしきったような口調で言う。少なくとも、仲間に対する態度ではないことはわかった。
「募金活動で襟首つかんで壁に叩きつけたりするわけ？　悲鳴上げるほど嫌がってるじゃん、その人」
不良たちの肩越しから、声の主の姿を確認する。
薄い緑色のブレザーに、オレンジ色に臙脂色のラインにチェックの入ったネクタイ、灰色のズボン――――その派手な制服は、雛見学園高校のものだ。偏差値の高い進学校として有名な私立高校だが、同時に派手な制服の高校としても有名だった。
年齢まではわからないが、どことなく制服に着られているような印象を受けた。もしかしたら、灯より年下なのかも知れない。

「何だよてめえ、文句でもあんの？」
「別にねーけど」
「じゃあ黙っとけよ」
「それとも何か？　お前がこいつの代わりやってくれるってか？」
灯から離れ、今度は少年を取り囲む不良たち。少年は一瞬だけ怯んだような表情を浮かべたが、すぐに元の無表情に戻った。何かを覚悟でもしたように、低い声で言う。
「……それでその人に手ぇ出さないってなら、考えるけど」
「はあ？　何それ、超ウケる」
「意味わかって言ってんのかよ、それ」
馬鹿にしきった笑い声が弾けた。不良たちは少年に注目している。灯には完全に背を向けていた。
躊躇う理由はどこにも無かった。実力行使しかない、と先ほど覚悟したばかりだ。
（どうか誰も見ていませんよーに！）
胸中で呟いてから、抱えていた学生鞄を大きく振りかぶる。分厚い英語の辞書や教科書がぎっしり入ったそれは、不良相手の武器としては十分だった。
遠心力を利用して、目の前にいた坊主頭に鞄を振り下ろす。身長差の問題で、当たったのは肩だった。重力には逆らわずに、そのまま鞄を投げ捨てる。衝撃に膝をついた坊主頭の背中を蹴り飛ばし、突然のことに理解が追いついていかず、呆然としている不良たちを睨みつける。
坊主頭は地面に転がり、肩を押さえて呻いている。気絶させられなかったことに舌打ちをして、灯は喉の奥で唸り声をあげた。
「……さっさと失せろ」
女子高生相手に反撃されるなどと思ってもいなかったのだろう。ハリネズミと茶髪は呆然と突っ立っている。助太刀をしてくれた少年も、目を丸くしていた。
実際に攻撃された坊主頭にしても似たようなものだろう。衝撃か

ら立ち直ると、よろよろと起き上がり、血走った眼でこちらを睨みつけてくる。やばいかも知れない、と身構えた。
「このアマ、調子に乗んな！」
坊主頭が殴りかかってくる。受け止める自信はなかった。なんとか身をひねって回避しようと――――
「……あれ？」
振り上げられた太い腕は、いつまで経っても落ちてこなかった。不思議に思って首をかしげると、
「朝っぱらから元気だな、お前ら」
聞き覚えのある声がした。声の主の姿は坊主頭の身体に隠れてほとんど見えない。だが、顔の左半分を覆うような大きな眼帯のおかげで、誰なのかはすぐにわかった。
「カズさん！」
歓声を上げる。カズは右手で坊主頭の肘を掴んだまま、こちらに向かって左手をひらひらと振ってきた。
「よう、なんか朝から大変そうだな」
「てめえ、このっ、離せよ！」
「良いのかなー？　俺にそんな口聞いて」
カズが坊主頭の肘を解放する。バランスを崩した坊主頭が灯の方へ倒れこむ前に、彼は自分よりも大柄な不良の襟首を掴んで、まるで猫の子にでもするかのように吊り上げて見せた。呆然としたままの茶髪とハリネズミに向かって、薄い笑みを向けながら告げる。
「俺はこうゆうことができるわけだけど、まだやるか？」
「いっ、いや……」
「も、もう良いです」
不良たちの答えに満足したように頷き、今度は持ち上げている不良に尋ねる。
「お前は？」
首を絞められているのに等しい坊主頭は、必死に首を横に振って見せた。同じように頷いて、手を離す。

「お、覚えてろよ！」
月並みな捨て台詞を残して、不良たちは逃げて行った。それを見送って、灯はほっと息をつく。
「ありがとうございます、助かりました」
「い、いや……俺は何もしてないっすよ」
まずは助太刀をしてくれた少年に礼を言う。少年は一瞬驚いたようにこちらを見て、それから小さく会釈してきた。
「カズさん、ありがとうございました」
「別に良いけど。……灯、今日調子悪いのか？」
「は？　いえ、まあ、元気ですけど」
心配そうな口調で言われて、首をかしげる。壁に叩きつけられた背中が少々痛むが、別に何の問題もない。
「昨日の引きずってるとか、風邪気味とか、別の何かとか、本当に何もないな？」
「ないです。ええと、なんでそんなことを？」
「お前なら、あれくらいどうにでもなるだろ？　なのに妙に大人しいし、悲鳴上げるし」
「……」
真顔で続けるカズの顔を、半眼で見つめる。盛大にため息をついてから、尋ねてみる。
「カズさん、いつから見てました？」
「……」
「いつから見てました？」
「……。えーと、不良っぽい奴に囲まれたあたりから、かな」
つまりは最初からだった。予想通りの答えに脱力する。すぐにそれから立ち直り、
「どうして最初っから助けに来てくれないんですかっ！」
抗議ついでに回し蹴りを一発。あっさりと避けられた。カズの口調から余裕が無くなる。
「いや、でもお前、ほら、大抵あっさり片付けてるじゃないか。や

ばそうになったら行こうって思って見てたし」
「あっさりじゃないですいつも必死です遅すぎます！」
「悪かった！　俺が悪かったから！　……あ」
灯の抗議――――もとい、回し蹴りだの掌底打だの――――を避けていたカズが、何かを思いついたように動きを止める。肘打ちの姿勢のまま動きを止めて、低い声で尋ねる。
「何ですか」
「灯、学校大丈夫か？」
「学校？　……あーっ！」
我に返る。そう言えば、遅刻ぎりぎりで全力疾走をしていた途中だった。
無慈悲に始業のチャイムが鳴り響く。青済女子高校のものだ。絶望的な気分になりつつも、転がっていた鞄を拾い、走り出す。
「すみませんカズさん、行ってきます！」
「おー、行ってらっしゃい」
「あ、お前もまずいんじゃねえ？　学校」
「いやまあ、もう不可抗力っすよね」
少年とカズの呑気なやり取りが、遠くから聞こえてきた。

第二章　「ちょっと、こっちはマジなんだってば」

「わーっ！　すみませんすみませんちょっと待って下さいーっ！」
必死の懇願も虚しく、校門は無慈悲に閉ざされて行く。無表情に仕事に徹している生徒を――――朝に校門を閉じるのは、生徒会に所属している生徒の役割である――――確認してみると、よりにもよって生徒会長だった。学年は一つ違うが、遅刻魔の灯とはすっかり顔馴染みである。
（あああもうっ！　今日は藤沢先輩かついてないな！）
もう人が通れる程の隙間は残されていない。だが、まだ完全には閉ざされていない。
全力疾走の勢いのまま、校門の直前で大きく跳ぶ。右手で校門をつかみ、身体を内側に押し込み、足から着地。
「藤沢先輩、おはようございます」
「はい、おはようちょっと待ちなさい」
一応礼儀として挨拶をしつつ駆け抜けようとしたが、襟首をつかまれて失敗する。さすが生徒会長、校門を跳び越えた程度では驚きもしないらしい。
「あなた、遅刻何回目？」
「えーっと、何回……と言いますと……」
「覚えてないほどってことね」
生徒会長――――藤沢彩子は盛大にため息をついた。
「色々と事情があるんですよ～」
「不良に絡まれたり、とか？」
「ええ、まあ……はい？」
予想もしていなかった言葉を彩子の口から聞いて、目を丸くする。
「見たわよ、今朝の。不良三人相手に喧嘩なんて、あなた結構無茶なのね」
眼鏡の奥の瞳が冷笑している。その意味を理解してから、灯も同

じような笑みを返した。先輩相手の礼儀など知ったことではない。
「向こうが絡んで来なきゃ私だって相手なんかしませんよ。にしても、ひどいですね、先輩。後輩が困ってるっていうのに、助けてくれないなんて」
「私はあなたと違ってか弱いのよ」
「でも、人を呼ぶことぐらいできたでしょう」
唸り声をあげても、彩子は全く動じなかった。吐き捨てるように告げる。
「結局、見て見ぬ振りをしただけじゃないですか」
「……行きなさい。ホームルーム、もうとっくに始まってるわよ」
彩子が去って行く。その背中に向かって、灯は舌打ちした。先輩への礼儀など、どうでも良くなっていた。

「よう、遅刻魔。今日は早いな～」
「遅刻魔ゆーな……」
とは言え、実際に遅刻しているのだから、強気に反論などできるわけもない。けらけらと笑う友人を横目に、机の上に突っ伏した。
教室にたどり着いた時には、既にホームルームは終わっていた。笑顔を怒りに引きつらせた担任に、放課後に生徒指導室へ行くように指示をされたのが一時間程前。現在は休み時間である。
「ま、あたしも今日呼び出し食らってるし、仲良く一緒に行こうか！」
「あー……」
友人が何故呼び出されたのか、聞かなくても何となく予想はついた。
男女平等が謳われるようになった現在でも、まだ「良妻賢母を目指し、良き妻、良き母を育成する」などと言う文章が目標として掲げられているような学校である。制服改造など認められるはずもなく、髪を染めるなどもってのほか。もっとも、女性として最低限の身だしなみとして、多少の化粧は認められている。

「りーちゃんは、今度は外国人に目覚めたわけ？」
「失礼な。イメチェンだよイメチェン」
目の前にいる友人は正真正銘日本人のはずである。が、現在は長い髪は鮮やかな金色に染められ、カラーコンタクトのおかげか、瞳の色は青くなっている。膝丈と決められているはずの制服のスカートは、短く切られ、すらりとした長い足を見せつけていた。身長百七十センチ以上の彼女には、金髪も青い瞳も短いスカートもよく似合っていた。それが担任の逆鱗に触れたのは、簡単に予想できる。
友人――――野口凛々子は、校則違反の常習犯だった。かと言って決して劣等生というわけではなく、筆記試験では上位十名の中に必ず入る。
校則破りの凛々子と遅刻魔の灯。何かしらでよく生徒指導室に呼び出されるため、そのうち妙な友情が育まれることになった。
「で、今日はどうしたの？　なんか妙に苦戦してたっぽいけど」
「りーちゃんも見てたの？」
がばっと身体を起こす。恨めしそうな視線を向けても、にやにやとした笑みが返ってくるだけである。
「見てたけど、あたしはか弱いからね」
「りーちゃんにまで見捨てられた～」
拗ねた口調で言って、再び机の上に倒れ込む。地団駄を踏む代わりに、手をばたばたと上下させた。
「見捨てたとは失礼な。ちゃんと人呼んだよ」
「誰を」
「えーと、何だっけ。ああ、ほら『カズさん』って人」
「あー……」
凛々子の話を聞いて、駄々をこねる気力もなくなった。代わりにカズへの怒りが湧いてくる。
――――人に呼ばれて来たのに、呑気に見学してたのか、あの人は。
「にしても、あかりんもついてないね。今月入ってからもう何回目

？　不良に絡まれるの」
「……私、もう大通り以外通らないことにする」
「で、大通りに行ったら今度はしつこい勧誘に捕まるわけだ」
「あう～」
　全くもってその通りなので、反論が出来ない。小柄で童顔、おまけに第一印象「大人しそう」となると、人気のないところでは不良に絡まれ、大通りでは妙な勧誘にしつこく付きまとわれる。外見で苦労したことは数えきれないほどあるが、得をしたことはほとんどない。
「でもそろそろ、本当に気を付けた方が良いよ、あかりん」
「ご忠告どーも」
「ちょっと、こっちはマジなんだってば」
　凛々子が声を潜めた。顔を上げて、友人の方を見る。
「メデューサって知ってる？」
「見ると石になっちゃうやつ？」
「んー、なんていうか、不良たちの間でもヤバイ奴扱いされてるような奴のあだ名的な？」
　初耳だった。首をかしげて、説明を待つ。
「男か女かもわからないらしいんだけどさ、喧嘩、滅茶苦茶強いらしいんだ。でもメデューサにやられた連中には、外傷はないんだって。ただ、目が赤く光って、その目を見た人はまるで石になったみたいに固まって……で、どこも怪我してないはずなのに、痛い痛いって怯え出すとか」
「目が光る……？」
　引っ掛かった。おとぎ話扱いされてはいるが、この青済市には確かに能力者と呼ばれる者が存在する。能力を使用する際、赤い光を纏うのはよくあることだ。もしかしたら――――
「それで、病院送りになっちゃった人も居るんだって。気を付けなよ、あかりん。いくら喧嘩に強くても、メデューサは普通じゃないよ」

「うん、気を付けるよ」
今度は真面目に頷いた。そんな化け物の相手などしたくはない。
しかし、もし相手が能力者であるのなら。
この先、遭遇する可能性は決して低くはなかった。

第三章　「よっ、今朝ぶり～」

「うはー、やーっと終わったー」
「今回は長かったね……」
「ねー。全く、しつこいっての。いつまでも同じことを何度も何度も何度も何度も繰り返して」
放課後。二人揃って仲良く生徒指導室へ向かうと、しかめ面の担任、無言で圧力をかけてくる生徒指導担当、無表情の学年主任が待っていた。担任の指示に従って着席した後は、三人の教師からお説教をされる。呼び出された生徒に出来ることは、ひたすら平身低頭して、教師の気がすむのを待つのみである。
しかし、校則破りで有名な友人は、大人しくはいはいと聞き流すことが出来ない性格だった。
「君、どうして髪なんて染めたの？　制服もそんなにしちゃって。校則で禁止されてることぐらい知ってただろ？」
「髪を染めたのはそうしたかったからです。制服も同じ」
「でも校則では」
「なんで髪染めたり、制服改造が禁止なんですか？」
「それは」
「不良になる前兆？　先生、私の成績ご存知ですよね？　不良の成績に見えます？」
「あのね、君、僕が言ってるのはそういうことじゃなくって」
「じゃあ何なんですか。私は不良なんかじゃありませんし、先生方が妄想してるようなこともしてません」
「だ、だからな、そういう格好をしていると、誤解されても仕方ないだろう。そういうことを避けるためにね」
「それって差別って言いません？　だったら、差別する方が悪いと思いますけど」
「いい加減にしなさい。今はそういう話をしてるんじゃない！」

一方、灯は凛々子ほど反抗的ではない。非が自分にあるのは充分にわかっている。ひたすら猛省して嵐が過ぎるのを待つだけである。
「速水、君、遅刻するの何回め？」
「……すみません」
「別に謝って欲しいわけじゃないんだけどね。こっちももういい加減にして欲しいんだよ。君も、こんなところに何度も呼び出されたりしたくないだろう？」
「ええ、まあ……はい」
「朝起きるのが大変ってのはよくわかるんだけどさ。もうちょっと頑張れないのかな。早めに寝るとか、目覚ましを一杯かけるとか」
「努力します」
「それももう何度も聞いてる気がするなあ。今度こそ本当にやってくれよ。僕もこんな話何度もするの嫌だからさあ」
しかし、遅刻常習犯のために、いくら教師の前で猛省してみせても、あまり信用されないのであった。
ともあれ、教師たちの長々とした説教も終わり、灯たちは自由の身となったのである。
校門をくぐり、並んで歩く。教育熱心な教師たちのおかげで、既に空は赤く染まっていた。
「これからどうする？　暇ならどっか遊びに行かない？」
「あー、ちょっと待って」
鞄から携帯電話を取り出す。メールが来ていた。確認してみると、
『本日午後８時集合。遅刻厳禁。もし何だったら迎えに行ってやろうか？』
送り主はカズだった。凛々子の方を向いて、両手を合わせる。
「ごめん、今日は無理」
「またバイト？」
「えーと、あー、まあ、そんなとこ」
ギルドでの活動は、表ではアルバイトということにしている。犯罪者を捕まえられれば、その賞金を得ることができるので、間違っ

てはいないと思う。ただ、時給があるわけではないし、失敗すれば収入はゼロだが。
灯がそうやって誘いを断るのはいつものことなので、凛々子も慣れている。軽く肩をすくませて、
「あんたも頑張るねえ。まあ、身体壊さない程度にしときなよ」
まるで幼い子ども相手にするように、灯の頭をぐしゃぐしゃとかき回してきた。大人しくされるがままになりながら、苦笑する。
「ああ、うん。ありがとね」
人に心配されるのは、正直に言えば嬉しい。だが、少し複雑な気持ちにもなる。それが何故なのか、説明することはできないが。

『学校から直接そちらに向かいます。迎えに来て頂かなくても大丈夫です。ありがとうございました』
凛々子と別れてから、カズの携帯に返信した。
指定された時間まではまだ大分あった。一度家に帰っても良かったのだが、そうすると今度は不良のゴールデンタイムに突入する。今朝みたいなことは避けたかった。時間厳守ともあるし、多少早めに行ったところで怒られはしないだろう。
「なあにーちゃん、ちょっと金貸してくれよ」
「俺たち今貧乏でさあ」
「なあ良いだろ？　人助けだと思ってさ」
（……あいつらは他の日本語を知らないんだろーか）
多分知らないんだろうな、見るからに頭悪そうだし。偏見とは承知でそう付け足す。
大通りから少し外れた小さな路地。金髪をハリネズミのように逆立てた不良、二メートル近い巨体の坊主頭、中途半端に長い茶髪で、へらへらと笑っている男。見覚えのある――――というか、今朝絡まれたばかりだ――――三人の不良が、同じ場所でまた誰かに絡んでいた。

哀れな被害者の姿は、坊主頭の背中に隠れて、灯の位置からでは見えない。三人の言葉から、どうやら今度は少年に絡んでいるらしいことはわかった。
知らない振りをして通り過ぎた方が良いのはわかっている。わざわざ厄介事に自分から首を突っ込む趣味はない。
だが――――

――――結局、見て見ぬ振りをしただけじゃないですか

（……あー、もう！）
自分の言葉を思い出す。先輩相手に偉そうにそんなことを言っていた。気づかなければ良かったのだが、気づいてしまったのだから仕方がない。
辺りを見回す。青済女子高校の生徒のほとんどは既に下校している時間帯ではあるが、万が一ということもある。
（誰も見ていませんように！）
胸中で祈ってから、不良たちの方へ向かう。
どうやら今回の被害者も、それなりに頑張っているらしい。近づいてみると、不良たちの苛立ちが伝わってくる。
「てめえ、耳イカれてんのかよ！　いい加減なんか言えってんだよ！　ああ！？」
坊主頭の肩を、ぽんぽんと叩く。振り返った坊主頭がこちらを認識する前に、その脇腹に拳を突き刺した。痛みによろめいた坊主頭の足を蹴飛ばし、転倒させる。痛みに呻く坊主頭は無視して、灯は残りの不良たちに向きなおった。
「よっ、今朝ぶり～」
にこやかに手を振ってみせる。こうなったらもう自棄である。
「てめえ、今朝の！」
「何のつもりだよ！」
「何のつもり？　んー、正義の味方とか？」

安い挑発だったが、不良たちはあっさりと乗ってくれた。顔を真っ赤にさせて、殴りかかってくる――――というよりは、腕をでたらめに振り回して向かってくる。

半歩身を引いて最初の一撃を避けて、お返しに掌底をお見舞いする。顎にまともに食らった茶髪は、後ろにいたハリネズミを巻き込んで仰向けに倒れた。巻き込まれたハリネズミが、起き上がろうともがきながら罵声を上げる。

「今のうちに……っ！」

それまで壁に貼り付くようにしていた被害者に向き直り――――灯は硬直した。

小柄な、可愛らしい顔立ちをした少年である。身長は灯より少し高い程度。もしかすると、中学生なのかも知れないと思った。どこにでもいる少年である――――その両目が、赤く光っていなければ。

（まさか）

反射的に思い出した話を、首を振って強引に打ち消した。今は、それよりも優先することがある。

「この野郎！」

茶髪の下からようやく這い出て来たハリネズミを肘打ちで沈めて、少年の腕をつかんだ。そのまま少年を引きずって、大通りへと飛び出す。

大通りにいる通行人など当てにできない。それは、今朝思い知らされていた。

（じゃあ、どこまで行けば）

わからないまま、とにかく走り続けるしかなかった。

第四章　「君、強いんだね」

できる限り人通りの多いところを選んで、少年を引きずるようにしながら走る。結局、交番に逃げ込むことしか思いつけなかった。普段何気なく通りすぎているのに、いざ頼りたいと思った時は、どこにあるのか思い出すのも難しい。

曖昧な記憶を頼りにでたらめに走っているうちに、限界の方が先に来た。道端に座り込み、肩で大きく息をする。辺りは暗くなりつつあったが、道の両脇にあるコンビニやファーストフード店の照明のおかげで、視界に困ることはなかった。仕事帰りと思われるサラリーマンが、顔をしかめて通りすぎて行った。

念のために後ろを確認する。不良たちの姿はなかった。どうやら上手く撒けたらしい。大きく息をつく。

「……あの」

「あっ、わっ、すみません」

不意に声を掛けられた。まだ少年の腕を掴んだままだったのを思い出して、慌てて手を離す。当の少年は、灯と同じ距離を走っていたというのに、息一つ乱していなかった。

（男女差ってやつ？　……冗談じゃない）

日頃の運動不足が祟っただけだ。これくらいの距離なら、男子にも後れは取らない。無理やりそう決めつける。

「あの……大丈夫？」

少年が小首をかしげてそう聞いてきた。目は暗めの茶色である。

――――赤く光ってはいない。

「えっと、あの……大丈夫、です」

少年の腕をつかんでいた手の方が、震えていた。もう片方の手をで腕をつかむ。なかなか治まりそうになかった。

それまで無表情だった少年が、ふわりと笑った。

「そう。ありがとう。どうすれば良いかわからなかったから、助か

ったよ」
「あ、いや、別に……私もああゆうのによく絡まれるから」
最初は見て見ぬ振りをしようとしていた、などとは口が裂けても言えなかった。
少年はにこにこと笑ったまま続ける。
「君、強いんだね」
「え？」
「凄く格好良かったから」
格好つけたわりには、あっと言う間にばててしまい、安心した途端に震えが止まらなくなる。情けないことこのうえなかった。
腕を握る手に、力を込める。
「……私は、強くないですよ」
「そうなの？」
「だから、もっと強くならないと」
「もう十分だと思うけどな」
少年がこちらに向かって手を差し伸べてくる。ありがたくその手を借りて立ち上がった。
「でも、あんまり無茶はしないようにね。女の子なんだし」
「え？　あ、はあ」
「今日はありがとう。助かったよ」
少年が片手を振って、去って行く。それを見送ってから、灯は思い出した。
（名前とか聞くの、忘れたな）
また会う機会などそうないだろうし、大した問題でもなかった。

他のギルドはどうなっているのか知らないが、星月夜の場合、拠点となる場所がいくつかある。この小さな診療所――――永江クリニックも、そのうちのひとつである。
「やあ、灯ちゃん。こんばんは」

「こんばんは」
入り口から入ってすぐの受付から、男性看護師が挨拶をしてくる。会釈をしながら奥へ向かおうとすると、声を掛けられた。
「カズさんから聞いたよ。今朝、大変だったんだって？」
「ああ……まあ、いつものことです」
「怪我とかしてない？　大丈夫？」
縁なしの眼鏡の向こうの瞳が、心配そうに揺れていた。
大きな草食動物を思わせる雰囲気の青年である。カズ程ではないにしろ、長身の部類だが、生まれついての童顔のせいで高校生に間違えられることもあるらしい。実際の年齢は、今年で二十歳になると聞いている。
「怪我とかは全然。この通り元気ですし」
「そっか。良かった。あ、これプレゼント」
ひらひらと振って見せた手の上に、小さなバッチのようなものが載せられる。銀色で、流れ星のようなデザインのものである。
「何ですか、これ」
「僕の発明品」
「発明品？」
首をかしげて尋ねると、彼は得意気に胸を張った。
「こんなに小さいけど、いわゆる発信器的なのがついています。太陽光で充電できるから、電池切れの心配もなし！」
「……はあ」
穏やかで大人しそう。事実その通りの彼――――如月草馬は、こうした「発明品」を作るのも得意だった。意外なことに殴る蹴るの喧嘩も得意らしく、先日は灯と同じくアマゾネスの足止め役になっていた。結局多勢に無勢で、二人とも気絶させられることになったが。
制服にそのまま付けるわけにはいかないので――――うっかり外し忘れて教師に見つかりでもしたら、また呼び出しである――――スラックスのポケットに押し込んだ。

「ほら、僕たち結構ばらばらに動くことが多いじゃない。だから、場所を把握しておきたいって、永江先生が言ってたんだよね。ギルドのシンボルみたいなのが欲しいって話も前に出てたし」
「あー、そうだったんですか」
「それがあれば、ここのパソコンで大体の位置がわかるようになってるから。なくさないようにね」
「はい」
笑顔の草馬に見送られ、奥へと向かう。診察室の脇に、下り階段があった。ここを降りれば、いつも作戦会議を行う広間がある。

第五章　「今回は、ちょっと手強いぞ」

通常、ギルドというのは十人前後で構成されているらしい。賞金を山分けするなら、少ない人数の方が良いからだ。それを考えると、二十人以上いる星月夜は変わっていると言える。

（そんなに他のギルドのことなんて知らないから、よくわからないけど）

その名の通り女性のみで構成されている「アマゾネス」、所属しているのが全員能力者との噂の「エデン」、犯罪者を捕らえるのではなく、各ギルドに情報を売ることを主としている「情報屋」、それから灯が所属している「星月夜」。灯が知っているのは、これくらいである。

「今回は、ちょっと手強いぞ」

永江クリニックの地下は、星月夜全員が入れるほどの広間になっている。パイプ椅子が適当に置かれており、灯はそのうちのひとつに座っていた。一番奥のスクリーンには今回の獲物が映されており、その脇にはカズが立っている。カズの横には小さな机があり、その上にはノートパソコンが置かれていた。操作をしているのは、白衣を着た二十代半ばと思われる女性だった。永江友香。この診療所の医師である。

いつも穏やかな笑みを浮かべているような印象を受けていたが、今は眼鏡の奥の瞳はノートパソコンの画面を睨み付けていた。何となく見ているうちに、こちらの視線に気付いたのか、友香が灯の方を見る。目があった。にっこりと笑って、友香がスクリーンの方を指差す。「ちゃんと見ないと怒られちゃうわよ」と言われたような気がした。軽く頭を下げて、スクリーンの方へ視線を戻す。

スクリーンには、二人の男性が映されていた。一人は大柄で顔や腕などに大きな傷跡が残っている男。もう一人は、色白で何となくひ弱そうな印象を受ける青年だった。

「最近出るようになった通り魔だ。被害者は中学生から高校生。学生を中心に狙って来ていると予想される」
（二人組？）
人がたくさん集まり過ぎた結果、青済市の治安はお世辞にも良いとは言えなくなった。朝のホームルームでは毎日のように通り魔についての警告がされるほどである。それでも、二人組の通り魔というのは珍しかった。
「それと、もうひとつ気になることがあるわ」
ノートパソコンから顔を上げて、友香がカズの捕捉をする。
「情報屋によると、被害者の共通点はｄｏｏｒｓを使用してたみたいね。この二人、ただの通り魔じゃなくて何か目的があるのかも知れないわ」
「おまけに、能力者らしいとの話もある」
カズの言葉に、灯は顔をしかめた。能力者が相手というのは今までも何度か経験している。普通の人間を相手にするのとは訳が違う。それは身を持って知っていた。
「今回は、二人組で行動しようと思う。草馬と亮平、千春と利恵、涼と透、それから灯と俺だ。残りは友香と一緒に援護を頼む」
現役の学生と、能力者相手でも引けを取らない者が選ばれた。その中には灯もいる。
実働隊に選ばれた者も、援護するように言われた者にも不満を言う人間はいなかった。星月夜のリーダーはカズである。リーダーが決めたことには――――実際には、友香など成人しているメンバーに相談しているのだろうが――――基本的には口を挟まない。星月夜の中の暗黙の了解だった。
「とにかく、今回はちょっと厄介だ。全員、無理はするなよ。深追いは禁物だ」
「みんな、如月君がくれたバッチは持ってるわね？　それでみんなの位置は常に把握してるわ」
「もし危なくなったら、すぐに連絡してくれ。助けに行く。――――

―以上だ」
カズの言葉と同時に、全員が一斉に立ち上がる。実働隊はカズの周りへ、援護隊は友香のところへと集まった。
「まあ、その、何て言うか……よろしくな」
「よろしくお願いします」
カズに向かって頭を下げる。他でも、ペアになった者同士で挨拶をしていた。
「今回、手強いみたいですから、強化お願いしても良いですか？」
カズにそう頼んでみると、顔をしかめられた。いつものことである。
カズの能力は肉体強化――――正確には違うらしいが、具体的に何と言えば良いのかわからないので、こう呼ばれている――――である。人間は限界を感じても、生命維持のためにある程度は余力を残している。その残った力を使うことができるようになる能力だ。
生命維持のための力を使うため、本人が元々持っている以上の力は出せないし、調子に乗って乱用すれば死ぬこともあり得る。使用者のカズが加減を調整できるので、灯が調子に乗ったところで、数日間筋肉痛に呻く程度で済むが。
それでもカズは、他人に能力を使うことをあまり良しとしていなかった。
「あ、僕もお願いします」
カズが何かを言う前に、何故か紺色のブレザーを抱えた草馬がそう言ってきた。制服の持ち主は、草馬の後ろで不貞腐れたような表情を浮かべている。だというのに、彼の方が草馬よりも年上に見えた。
「あれ、それ亮平の？」
「非常に不本意ですが、亮平君より僕の方が高校生っぽいって意見を頂きまして。仕方ないから制服を借りることになったんです。サイズは問題ないし」
「ああ」

「どうせ俺は老け顔です」
拗ねたように亮平が言う。カズや草馬と並ぶほどの長身で、外見だけならば二十代後半で通じるが、彼は灯よりも年下の高校一年生である。
「まあまあ。ガキに見られるよりはマシだよ。この前なんて『何あの小動物！』だったしね」
少しは慰めになるかと思って自虐的に言ってみたが、無意味だったらしい。地を這うようなうめき声が聞こえてくる。
「……スーパーでワインの試飲を押し付けられた時の俺の気持ちがわかりますか？」
「……。あー、それは嫌かも」
「周りに大人なんていないんですよ？　お酒は二十歳からなんですよ？　パートのおばちゃんに俺まだ未成年ですー、とか言っても何故かにこにこ笑ってるだけなんですよ！？」
いつも実際の年齢より年下に見られてばかりなので、考えてみたこともなかったが、年上に見られるのもそれなりに大変なのかも知れない。
落ち込んでいる亮平の肩を、宥めるようにぽんぽんと叩く。そんなやり取りをしているうちに、カズに能力を使って欲しいと言う希望者が増えていた。カズが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。
「カズさん、お願いします」
「こっちは女の子二人なのよ。万が一があったら困るでしょ？　だから、お願い」
「ほらほら、みんなそう言ってるんだし、やっちゃいなってー」
口々に勝手なことを言われて、カズは盛大にため息をついた。
「筋肉痛になったりしても、俺を恨むなよ」
低い声でそう前置きしてから、一番近くにいた灯の肩に右手を置く。その手が薄く赤い光に覆われた。
「――――さあ、覚悟は良いな？」

第六章　夕暮れの決闘

「待てよ、おい、待てっば！」
夕暮れ。人気のない路地裏で、二人の少年が言い争っていた。
ひとりは、まるで少女のような可愛らしい顔立ちをした少年。もうひとりは、身に纏っている学ランの襟まで掛かるほどの長髪に、眼鏡を掛けた少年。いずれも十代半ばほどだが、二人の間には、高校生同士の喧嘩とは思えないような、不穏な空気が漂っていた。
「もう何度も言ったはずだよ、陣ちゃん」
可愛らしい顔立ちの少年が、冷たく告げる。『陣ちゃん』という言葉には、親しみなどは全くなかった。
「僕はもう、君に守られるほど弱くない。それに君は、もう僕と関わらない方が良いんだ」
「だから、何でだって聞いてるんだ！」
眼鏡の少年が叫ぶ。
「俺だって何度も言ってるぞ。何で居なくなったりした。どうして俺たちを避けるんだ。……俺が当てにならないって言うんなら、竜飛崎さんをどうして頼らない。どうして一人で全部やろうとする！？」
少女のような少年は、何も言わなかった。変わりに、暗めの茶色だった瞳が、徐々に紅く染まっていく。
それを見て、眼鏡の少年が息を飲んだ。それから、呻くように呟く。
「そうかよ――――結局力ずくかよ」
眼鏡の少年の右腕にも、赤い光が灯った。指の先から肩の方へ、赤い光が昇っていく。腕の付け根まで達すると、赤い光が弾けた。少年の白い腕があるはずの場所には、獰猛な蛇の頭があった。
返事はない。話し合いができる雰囲気でもなかった。
睨み合う。緊張が高まり、少年たちは同時に動きだそうと――――

「夕暮れの路地裏で少年同士の喧嘩かあ。いやあ、青春だね」
場違いに呑気な声が、眼鏡の少年の後ろから響いた。赤い目の少年の表情は変わらない。眼鏡の少年が、振り向きもせずに不機嫌に言う。
「またお前かよ……邪魔するなよ、ピエロ」
「夕暮れの決闘。君にしてはなかなかロマンがあるじゃないか。感心感心」
白い燕尾服にシルクハット。白塗りの顔の右目には、大きな赤い星が、左頬には青い涙が描かれている。眼鏡の少年が呼んだように、まさしく道化師のような格好をしていた。右手に持った淡い桃色の扇子を軽く開いて、ぱたぱたと振っている。
「でも、観客は僕だけじゃないようだよ」
道化師が、何かを示すように扇子を真っ直ぐ突き出した。赤い目の少年が、半歩身を引いてそちらを見る。眼鏡の少年も、一瞬後に気付いた。
赤い目の少年の後ろに、呆然とした表情の男子高校生がいた。
薄い緑色のブレザーに、オレンジに臙脂色のラインにチェックが入ったネクタイ、灰色のズボン。派手な制服と高い偏差値で有名な、雛見学園高校の制服である。
男子高校生の目は、眼鏡の少年の右肩から生えている蛇の頭に釘付けになっていた。それから道化師、赤い目の少年へと視線を移す。
「目を合わせるな！」
眼鏡の少年の警告と同時に、赤い目の少年が動いた。呆然としたままの男子高校生へ向かって手を伸ばす。
道化師の右手が赤い光を帯びた。扇子を開き、大きく右から左へと振るう。本来ならそよ風程度しか起こせない道具から、まるで台風のような強風が産み出された。
後退りをしようとしていた男子高校生は、暴力的な強風に押し倒されて仰向けに転倒した。赤い目の少年の手は空を切る。
赤い目の少年が、道化師と眼鏡の少年に視線だけを投げる。眼鏡

の少年はそれをまっすぐに受け止め、道化師は苦笑と共にシルクハットを引き下げて視線から逃れた。男子高校生は転倒した時に頭でも打ったのか、起き上がる気配はない。地面に倒れたままの男子高校生に一瞬だけ視線を落とした後、赤い目の少年は眼鏡の少年と道化師に背を向けて走り去ろうとした。

「……っ、待て！」

眼鏡の少年が赤い目の少年に向かって、右腕を突き出した。蛇の頭が遠ざかる少年の背中に向かって伸びていく。そのまま赤い目の少年の肩に噛みつくように見えた蛇の頭は、何を思ったのか急に進路を変更して、コンクリートの壁に激突した。壁に叩きつけられた蛇の頭が悲鳴を上げる。赤い目の少年の背中は、既に見えなくなっていた。

「あーあ。逃がしちゃったね」

右腕を押さえてうずくまった眼鏡の少年に、道化師が声をかけた。眼鏡の少年は答えない。地面をのたうつ蛇の身体が、淡い赤い光に包まれた。徐々に光が薄れ、蛇の身体も消えていく。眼鏡の少年の腕が蛇に変化した時と同じように、赤い光は少年の肩にまで昇り、やがて弾けた。光が消えた後には、元の白い腕に戻っている。

「彼と目を合わせたら、彼の世界に引き込まれる。ルールも審判も全部彼。だからあの子と戦うつもりなら、まず絶対に目を合わせちゃいけない。それは君が、一番よくわかってたと思うんだけど？陣野友喜君」

「……うるせえよ」

道化師が歌うような口調で言う。陣野は喉の奥で唸り声を上げて道化師を睨みつけた。殺気に満ちた視線を受けても、道化師は動じない。無意味に扇子を閉じたり開いたりしながら、口元にうっすらと笑みを浮かべている。

「まあ、正々堂々と戦いたいという気持ちはわからなくもない。あの子の世界の中であの子に勝てなければ、君にとっては意味なんてないんだものね？」

「うるせえって言ってんだろ！」
からかうように言う道化師に向かって、陣野は左の拳を突き刺そうとした。道化師は大きく後ろに跳んで、それを避ける。
「あー、怖い怖い。蛇野郎君をこれ以上怒らせるとちょっと面倒だ。僕はここでさよならさせてもらおう」
「てめえ……」
「あ、そうそう。そこの気絶してる高校生君をどうするかは君に任せるよ。まあ、君たちのギルドのリーダー、あの電気野郎にどうにかしてもらうのが一番だろう。と、アドバイスはしたよ。じゃあね」
ひらひらと閉じた扇子を振って、道化師は去って行った。
「おいこら！　卑怯だ！　それは！」
抗議したところで、道化師が戻ってくるわけがなかった。後には、陣野と気絶したままの男子高校生が残された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7909p/

SAI

2011年10月1日03時14分発行